

キリスト教教育

—大学での実践における一考察—

黄 大 衛

An examination of Collage Christian Education in Practice

Dawei Huang

1. はじめに

筆者は九州ルーテル学院大学（以下「本学」）で10年余りに亘ってチャプレンとしてキリスト教教育を実践してきた。その実践における気づきを振り返ってまとめてみたい。

本学は熊本県内で唯一の宗教系キリスト教主義大学である。本学の建学の精神は、「キリスト教精神に基づいて、全人格を磨き、神と人と社会に対して最善を尽くして、愛と奉仕に生きる有能な人材の育成」である。¹これが本学でキリスト教教育を行う目的である。

さて、本学の新生の99%はキリスト教と無関係の環境で育ったようである。従って従来の宗教と異なるキリスト教への警戒心や恐怖感を持つことは理解できる。本学はまさにそのような学生にキリスト教の教えを伝えなければならない。これも本学の使命である。

ここで言うキリスト教教育とは、神の愛を伝え、愛の心を育てることである。ところで、人間の愛には、一般的に2種類があるだろう。

一つは互いの愛である。例えば日常の活動の中での話し合い、助け合いの「合い」の部分であり、相互的な行為である。また、さらに現実の「恋愛」や交友も相互的な行動でなければ成り立たない。

もう一つの愛は親に見られるような愛である。親が子への愛は時に一方的な行為である。それは無償で、且つ変わらないものだが、前提がある。つまり自分の子でなければ通じない愛である。

この二つの人間の愛のほか、もう一つの愛がある。それは神の愛であり、一方通行的なもので、無償、

無条件、普遍的な愛である。ギリシャ語では、「アガペー」と言われる。

面白いのは、辞書で「アガペー」を調べると、「キリスト教における愛。罪深い人間に対する神の愛、人間どうしの兄弟愛など、自己犠牲的・非打算的な愛をいう」²と説明されていることである。なぜ神の愛と言えるのかと考えると、神しかできないものだからである。だから筆者はいつもこの説明は素晴らしく思う。

またキリスト教の信仰対象であるイエスが語ったこういう言葉がある。「あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」³ここで言う「愛」は、「アガペー」というギリシャ語の語源を使っている。そうすると、イエスのこの命令は、こういうものになる。つまり、たとえ人が神の愛を実施出来なくてもできるようにすべきだと。これこそ、イエスの命令であり、神の期待なのである。そしてそれを現実にするこそキリスト教教育である。

確かに、ここの聖書で言うイエスの命令は、そもそもイエスに特定された小さい共同体（教会）を対象としていることを指摘しておかなければならない。教会とはつまり信者同志の共同体である。だからこの愛は、狭隘な愛だという誤解が生じるかもしれない。それにしても、「この愛は狭い」と非難することはできない。キリスト教が強調している愛は小さい範囲にとどまっておらず広がり、影響を与えて社会に働きかけるものである。しかし、まず小さい共同体の中で、人を愛せなければ、共同体外の人々に愛を表すことは不可能であろう。もし社会も広い範囲

で互いに愛し合うことができれば、その社会はどのように美しくなるであろう。だから、キリスト教の教えは小さいようでも必ず社会に貢献できると信じている。

一方、2014年に文部科学省より全国の小・中学校に、道徳教材として『私たちの道徳』が配布された。このこと、またこの教材から、国は子どもたちに対する道徳教育をいかに重視し、また期待しているかが分かる。

この教材の道徳の目的を一言で言うと、「日本人としての自覚をもち世界に貢献する」⁴であろう。ここで求めている「世界に貢献する」目的は、キリスト教教育で求めている「社会に貢献する」目的とほぼ一致である。ところがそれと同時に、『私たちの道徳』には「国を愛する」意思も筆者に強く印象付けられる。それに対し、キリスト教で強調している愛は地域性を超えたより普遍的なものである。

なぜなら、キリスト教ではあらゆる民族、国、文化、性別、階層などの壁を超えた他者への愛を大変重視しているからである。この愛を実践できれば、社会への貢献になる。これこそキリスト教教育を実施する原動力になっている。それゆえ、筆者はキリスト教教育とは隣人愛の実践を促す教育であると考えている。

2. 教理の伝達

キリスト教教育とは、聖書全体を貫く愛の教えに基づく愛の実践を促すものと筆者は考える。つまり「人が自分自身と共に、他人も大事にする心を整える教育だ」と言えるだろう。次に、筆者の実践において教理の伝達（主に授業）での取り組みを振り返ってみたい。

授業では学生の抱く宗教への警戒心を解消するために、まずキリスト教の歴史や教えそのものを理解させること、そして倫理観・世界観を伝えている。つまり「宗教」という「イメージ」ではなく、「歴史的客観的に検証し得る出来事」としてのキリスト教を伝えた上で、隣人愛を教えているのである。

本学のキリスト教教育は、キリスト教に関する授業と宗教活動によって組み合わせられている。

授業では、一年生への必修科目として「キリスト教Ⅰ」「キリスト教Ⅱ」がある。他の必修でない科目

は「聖書英語」「宗教音楽A」「宗教音楽B」「宗教音楽C」「キリスト教と倫理」「キリスト教と文学」もある。因みに筆者は本学で一年生の全員に「キリスト教Ⅱ」の授業を担当している。

そして主な宗教活動は、月曜日から金曜日までの毎日の礼拝やサマーキャンプ、クリスマス礼拝である。また、年に1回全教職員向きのキリスト教講座を行う。

ところで、キリスト教教育と言いながら、まずこれらの活動が宗教勧誘でないことを予め明言しなければならない。

それを強調し始めたきっかけは、9年前、新入生向きの宗教オリエンテーションを行った時のことであった。当時、宗教活動をリードしている学生の四年生代表が新入生の前でこう語った。「皆さん、宗教活動に積極的に参加してください。きっとためになります。しかも宗教勧誘などへの心配も一切ありません。なぜかと言うと、私をそのお手本として見てください。三年生までその委員長を務めていましたが、キリスト教の信仰に無関係でした」と。筆者はその時から、キリスト教教育とキリスト教への勧誘を厳格に区別する必要性に気づいた。その時から、筆者も学生だけではなく、教職員、特に新任の教職員にも、キリスト教教育はキリスト教への勧誘でないことを強調し始めたのである。

ここで、まず教会と学校との違いに対する認識を確認しておく。そもそも、筆者は10年前、教会の牧師から本学のチャプレンとして赴任した時、その違いに無頓着であった。ちなみに、チャプレンとは、大学における牧師である。だから、同じ牧師の仕事で、いずれもキリスト教の教えを人に伝えることは同じなので、その違いを見落としていた。しかし両者の違いは歴然としている。

教会では、牧師が自分の「信じていること」を信者や求道者に伝える。一方学校では、チャプレンが自分の「知っていること」を学生に伝えるのである。

筆者はその違いを見落としたので、10年前の最初の「キリスト教概説Ⅱ」という授業で、全く教会で話すのと同じ口調で学生に教えた。それゆえ、授業で筆者の話を目に聞く学生はほとんどいなかった。実際50人のクラスで、一人か二人が真剣に授業を聞いてくれるなら筆者は励まされていた。当時の惨めな様子はだれもが想像できるだろう。しかし今は、学校と教会を弁えて語るのも、学生はほとんど

全員が聴いてくれている。

また、筆者は県内で本学より規模が大きい総合大学でも、「キリスト教概論」を通年で教えている。それは外国語学部英米文化学科の選択必修科目である。履修対象は1年生～4年生で、授業での学生数は百か百数十人の程度である。筆者は本学と同様、キリスト教を「知識」して教えている故に大多数の学生は真面目に授業を聴いている。

以上、筆者の授業における教理教育を振り返った。筆者が教会で、信者中心の世界で通用したことが学生には通用しないという現実から問題意識が生まれ、試行錯誤を繰り返した。牧師として視野が広げられ一般社会に向かっていく方向性が強められた。このことは、これから教会の伝道においても有益な気づきである。

3. キリスト教の隣人観・隣人愛

次にキリスト教教育における隣人愛の実践に関連して、キリスト教における隣人観と隣人愛について聖書から確認したい。

筆者はキリスト教の考え方が人生の視野を広げると認識し、それを目的としてキリスト教教育に努めている。そして新しい世界観・新しい生き方に触れる機会を設ける意識でキリスト教教育に取り組んでいる。

ではなぜキリスト教によって教えられるものが新しい世界観だと言えるであろう。一言で言うと、「キリスト教の精神」を身に付ければ、人が「自我を超え」て、「隣人のことをも視野に入れ、大事にする」ことができるからである。

第一に、キリスト教の精神とは、まず唯一の主権者である神を認めることから始まる。

この世の従来の宗教には、すべて「一神教」と「多神教」と二つに分けられるであろう。

「一神教」は、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教、三つだけである。その他は全部「多神教」に属している。想像して欲しい。例えば、神社と言っても、そこに祀られているのは複数あり、礼拝者はまず自分の目的、自分の願いに合わせて、祀る対象を選ばなければならない。それはデパートで買い物をするのと似ている。人が神を、主導権をもって選ばなければならないのである。そのことは人間の生

まれつきの自己中心の性質にあっているので、人は違和感を覚えない。

それと正反対に、「一神教」では、神が唯一であり、神はすべてに対する主導権を握っている存在である。それゆえこの神の前に、人間の従来のプライドなどを捨てなければならない。だからこの神を前にすると、人は違和感を覚え、無意識の内に抵抗を覚える。それは、もしその唯一神を受け入れるなら、従来の考え方を直す必要があるのも、違和感を覚える。だからこそ新しい考え方、或いは新しい世界観と言えるのである。

第二に、「自我を超える」ということである。新しい世界観に照らして、人はまず従来の生き方を考え直す必要が出てくる。

前述の通りに、人間はだれもが自己中心的である。中国には自己中心の行為を正当化する言葉がある。

「人不為己、天誅地滅」と。日本語に訳せばこうなる。「もし人が自分のためにしなければ、天も地もこの人を滅ぼす」と。

しかし、キリスト教の教えは自己中心、自己追求と正反対である。キリスト教では神の言葉である聖書を生き方の基準とする。その聖書の全体を貫いて、繰り返している言葉がこうである。『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたに神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』⁵と。言い換えれば、「心を込めて、行動をもって、神を愛し、そして自分のように隣人を愛する」という言葉になる。そうすると、自分のように人を愛するなら、他人を愛する前に、まず自分を大事にしなければならなくなるだろう。そうしないと、自分を軽んじながら、自分のように人を大事にすることも不可能だからである。そうすると、このキリスト教の精神を一言でまとめると、「神を愛し、自分を愛し、隣人を愛す」ということになる。

ここに第三の、他者への視点と尊重という新しい世界観の要素がある。一般的には、神を見た人はいない。それでは、神をどう愛することができるだろうか？ 答えは同じ新約聖書にある。つまり他者を愛することを通して神を愛するのである。次のような記事が聖書にある。「そこで、王は答える。『はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。』」⁶と。それはキリスト教の神であるイエスの例え話の中の一句である。文脈はこうである。

世の終わるところで、神である主は（譬え話の中では「王」と言われている）人々を二つのグループに分けて裁く。一つは正しい人。一つは正しくない人。そして主は正しい人たちにこう言った。『さあ、わたしの父に祝福された人たち、天地創造の時からお前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい。お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。』と。すると、その人たちが戸惑い、こういう質問をした。『私たちはいつ王様にこういうことをしたのか？』と。

すると先ほど本文に引用された言葉で主は答えたのである。それをもう一度繰り返す。『はっきりしておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。』ここで言う『この最も小さい者の一人』とは、私たちの周囲にいる弱者を含めてごく普通の人を指している言葉である。

そしてこのイエスの例え話から三つのことが分かる。

一つ目は、人がした他人への行動は無意識の内にすべて神に覚えられ、神に報われること。

二つ目は、人における隣人の位置が神と同じようなレベルまで上げられていること。

三つ目は、神と人間とのやりとりの間に隣人が入って、媒体となっていること。

これこそ、キリスト教の精神と言えるキリスト教的な考え方の要である。本学のスクールモットーである「感恩奉仕」はまさにこの精神に沿っていると言える。

さて「感恩奉仕」は漢語で、上記の「第二に」述べた説明に基づくなら、こういう意味になる。つまり人＝神から受けた恩恵を感謝の気持ちで人＝神に奉仕することを意味している。

しかも「感恩奉仕」の中の「感」は、ただ感謝を意味しているだけではなく、「感じ取る」という意味も隠されていることを見落とせない。なぜなら、日々受けている恵みを感じ取らなければ、その恵みは見落としてしまう。そうなれば、受けた恵みを当たり前のように思っただけで恵みと思わず、不平不満になりうるからである。

だから、まずたくさんの恵みを感じ取って、感謝

しなければいけないほどの気持ちで人に奉仕に行く。こういう意味でこのスクールモットーの「感恩奉仕」が実現できれば、ただのボランティアより意味が深いであろう。以上がキリスト教の世界観・考え方である。自己中心自己追求から、自我を超えた唯一神を中心にした世界では、神を愛し、人を愛し、自分を愛することを通して神を知るのである。

4. 宗教活動の組織

以上、この拙論の前半では授業におけるキリスト教教育の実践と内容について見てきた。続いて後半では授業以外における活動について述べてみたい。この章では活動を担う組織について見ていく。

キリスト教教育は、授業のほか、宗教活動の実施にも大きな役割を果たしているのである。

この宗教活動を計画通りに進ませるために、本学には「チャペル委員会」という学生によって編成された組織がある。それを指導するのは「宗教センター」の仕事である。そしてこの「宗教センター」の上に諮問機関として、教職員によって作られた「宗教委員会」という組織があり、その委員が実質的にチャペル活動を支えることもある。

さてこの宗教活動の中で一番主な活動は毎日の礼拝である。ところで本学では、礼拝に自由参加という方針である。そこでできるだけ多くの学生に礼拝出席を促すため、本学は大変力を入れているのである。極端に言えば、毎日の礼拝を滞りなく実施できるように学生組織の「チャペル委員会」を作り、宗教センターにも1人の職員をもうけているのである。

一方、本学には学生全員のメールボックスは置かれていない。それで筆者は恣意的にすべての学生に知らせることはできない。だから教員の協力がなければ学生全員との繋がりがなくなる、という点が宗教活動の実施に大きく影響しているのが現状である。

(1) 「宗教委員会」

委員会には、2019年度は教員が5人、職員が2人、合計7人がいる。その中に、チャプレンと宗教センターの1人の職員も含まれる。また委員のうち5人がキリスト教信者である。

委員会は月一回の会議を開き、一ヶ月の活動を計画する。そして、筆者と宗教センターの職員と一緒に

に、「宗教委員会」の決定事項を「チャペル委員会」に伝え、計画通りに実施していくのである。

(2) 「チャペル委員会」の組織

「チャペル委員会」は文字通りに、大学のチャペル礼拝のために主な活動を行っている。だから、毎日の礼拝が順調に進められるかどうかは、チャペル委員会の働きに大きく影響されている。

さて「チャペル委員会」は、大学の「学生自治会」の性質と違い、学長に委嘱された学生の組織である。

毎年の総会で選出された役員に研修会を行い、そして新年度の初頭にチャペル委員の全員にも研修会を行う。会員は一年ごとに更新されている。入退会が自由だが、宗教委員長にその入退会の理由を言うことが義務付けられている。途中入会には宗教委員長による一対一のプチ研修会を行う必要がある。

「チャペル委員会」は形式には二つの部門によって構成されている。

一つは讚美部門である。それは聖歌隊、オルガニスト、ハンドベルチームによって組み立てられている。宗教委員である音楽専門の宣教師教員がそれを指導している。ちなみに、1年生と2年生の学生は、指導やレッスンを受けながら、志願すれば、「宗教音楽A」「宗教音楽B」「宗教音楽C」の単位を獲られる。この設定から、礼拝における音楽訓練のレベルの高さを知ることができる。

もう一つの部門は、礼拝係、広報係、奉仕係という三つの係に組み立てられている。この二つの部門が実質的には一体となっている。なぜなら学生が双方に自由に参加しているからである。

その中の讚美部門は直接礼拝のために設けられている。

そして礼拝係は毎日の礼拝準備を主な仕事としている。一日は聖壇の台拭きから始まり、礼拝の場所を整える。そして讚美歌プリントの用意、チャペルの入り口での参加者への挨拶送迎、そして礼拝後の片付けである。ちなみに、筆者も含めて、誰もがその挨拶に励まされているに違いない。

広報係は、自分で「読んでっ！」という新聞を作

ることが主な仕事である。だから、新聞のための取材、インタビュー、教会訪問、原稿の計画などがある。そのほかは宗教行事に合わせての撮影や宣伝なども大きな働きである。

奉仕係の仕事は直接に礼拝と関係していないが、キリスト教における愛を人に伝えることは礼拝と共通である。少なくとも、礼拝を通して教えられたことの実践には、礼拝と因果関係がある。つまり礼拝は因、奉仕係の奉仕は果である。

具体的な仕事は、大学内外のボランティア活動である。例えば、年に2回学内のチャペル清掃。また路上生活の方を支援するために、月1回のおにぎり配り、年に1回のおにぎり作り。そのほかYMCAに要請された種々のボランティアなどもある。

以上の部門別の働きのほか、チャペル委員の全員に当番で、礼拝での司式や聖書朗読を分担させている。

(3) 「チャペル委員会」の役割

今年のチャペル委員は87人で(表1を参照)、そのうち、聖歌隊は20人、オルガニストは13人、ハンドベルチームは14人、礼拝係は32人、広報係は21人、奉仕係は34人である(2019年7月現在)。

近年、ずっと構成員数は80人前後、多ければ90人台に乗っていたが、表1に示されているように、2017年度と2018年度、連続2年間急に60人台までに減ってしまった。

チャペル委員会は流動的な学生の組織である。だから中核となる学生が少なければ、発想も乏しくなり、活動をも行いにくくなってくる。

筆者が以前日本福音ルーテル教会で勤めていた時に聞いた言葉を思い出した。それはこうである。「羊は羊飼いではなく、羊に生まれるのだ」と。実は、教会では、牧師を羊飼い、信者を羊と例えられる。それゆえもし教会が順調に成長できなければ、自然に牧師の責任に帰するであろう。それに対して先ほどの言葉は教会の成長の実際的な一つの現実の説明である。つまり牧師には責任が重い、教会を成長させるには信徒の果たしている役割がもっと大きい、

表1 チャペル委員の統計

年度	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019
人数	90	85	79	86	85	65	62	87

出所：筆者作成

ということである。

なぜここでこの言葉を引用するのかと言うと、チャペル委員会の活動を活発にさせるには、学生の役割が大きいからである。

赴任当初は、従来の「チャペル委員会」には名義会員が多かった。そして例年の努力によって、この現象が徐々に改善されてきたとしてもまだ多少残っている。このような現実があるので、全体が60人台なると活会員がさらに減る可能性がある。そうすると、チャペル委員会の機能を果たせない。幸いなことは、この2年間、60人台になっただけでも、名義会員の存在が明白に感じられなくなった。それにしても、危機感はずっと残っていたに違いない。

ところで、今年は2年ぶりに会員数が80人台に戻った。さらに名義会員数がほとんどいない。本当に励まされた。それは学生の質が良かったゆえか、宗教センターの職員の献身的働きの結果か、その原因は両方ともあると思う。

一方、学生がチャペル委員会、或いは礼拝のために、献身的に働いたとしても、一方的に損を受けたわけではない。犠牲を払ったとしても、それと同時に学生自身の成長にも役に立ったのである。筆者はチャペル委員の学生と直接にかかわっていたので、学生の著しい成長を多く目撃した。また一つの事実としては、「チャペル委員会」で活躍している学生の成績が良く、奨学生も多いことである。この学生たちを指導した筆者にとっては、大きな慰めと励みである。

(4) 「サマーキャンプ」

サマーキャンプは本学のキリスト教育では一つの

主な活動である。大体毎年9月の1週目の火曜日と水曜日に行く。定員は25人としている。それはマイクロバス1台、補助席を除く数である。なぜなら、長距離のケースが多く、荷物も多いため、補助席を使えないからである。

そもそも宗教委員の全員が引率に関わるが、それで、出来るだけ多くの学生に参加させるために、4年前から引率の人数を減らし、今は最小限の場合は、筆者と宗教センターの職員と運転手の3人だけである。

例年、学生の募集は2週間以上かかったが、徐々に人気になって来て、今年の募集はたったの2日だけであった。

九州地域には、キリスト教が酷く弾圧されたという歴史的な負の財産が多い。そして学生が現地でその歴史の学びを通して、その歴史に隠されている本質に触れることができた。だから、きっと学生に有意義だと確信しながら、毎年の初頭に楽しくサマーキャンプの計画を立てるのである。

5. 礼拝

ここまで筆者はキリスト教教育の実践について隣人愛の実践を促す教育と考え、授業や行事などでの教育を紹介してきた。しかしキリスト教教育においての大前提を軽んじることはできない。それは聖書の示す神を認め崇める信仰を促すことである。学校として信仰の勧誘は控えているが、信仰の営みである礼拝という行為への参加を促しつつ、筆者は学生たちに神認識を促すべく実践してきた。次にこの礼

表2 サマーキャンプのまとめ

年度	場所	テーマ
2012	長崎	「隠れキリシタン」
2013	熊本	「熊本のルーテル教会を知る ～教会はイエス様の手と足～」
2014	大分	「キリスト教の歴史を辿る ～豊後編～」
2015	天草	「キリスト教の歴史を辿る ～天草の隠れキリシタン編～」
2016	鹿児島知覧	「平和の尊さ・命の大切さ」
2017	長崎	「キリスト教の歴史を辿る ～長崎の隠れキリシタン編～」
2018	大分	「ペトロ・カスイ・岐部神父の殉教」
2019	天草	「キリスト教の歴史を辿る ～天草の隠れキリシタン編～」

出所：筆者作成

拝についての実践を述べてみたい。

本学の教育は知育・体育・徳育のほか、霊育にも力を入れている。霊育とは、即ちキリスト教教育である。そしてキリスト教教育は、大学の理性教育に対して、寧ろ感性教育と言えよう。つまり、その教育を通して、直観的能力や感受性を育てるのである。

さて本学の前身は九州女学院短期大学（1975～1998）である。そしてその伝統を継ぎ、短大の時と同じ、本大学の一年は、礼拝形式による入学式に始まり、礼拝式の卒業式に終わりの教育責務を負っている。しかも礼拝は感性教育の重要な一環である。

ただ、短大では、週2日（含週1回の全学礼拝）の礼拝に出席することは義務づけられていたが、大学では、前述のように礼拝に完全に自由参加の方針が決められた。この違いは実に礼拝の出席率に直接影響している。大学のチャペル礼拝は、特に初めてキリスト教と出会った学生にとっては、敬遠したいものようである。だから、筆者は礼拝を、県内唯一の得難いチャンスとして、学生に勧めている。学生もそれに素直に答えた。結果から言うと、本学では礼拝が好きになった学生は大勢いるのである。

ところで、大学の礼拝は教会の礼拝と違う。だから学校が主体となって、キリスト教教育の目標を達成するために行っている行事であることをいつも念頭に置くよう努めている。

結果的に本学では、学生だけではなく、教職員も、他宗教の方々も礼拝に積極的に出席している。それにしても礼拝の利点を、より多くの方々に理解させることは、これからの課題として、依然残っている。

さて、礼拝の場所は大学のチャペルである。毎日午前、授業の1限と2限の間の30分の休憩を用いてその真中の15分間を取り、10：17～10：32に行う。

(1) 礼拝の内容

毎日15分間の礼拝で、その約半分の7～8分間はお話の時間として設定している。スピーチ担当者としては、メインは筆者本人だが、月に2回中高のチャプレンが担当。また市内ルーテル教会の牧師は平均で毎月2人、他教派の牧師も2人を招く。これも教会と違い、幅広い多くの方々から様々な話を聞ける機会があることは大学礼拝のメリットだと思う。そのほか、月2～3回程度、教職員（特に宗教委員の方々）や学生が担当している。

もちろん、スピーチ担当者が礼拝の場にふさわし

いかどうかについては、筆者が責任を持って決めるのである。

そして礼拝の内容は、通常の礼拝のほか、各行事に合わせてすることも多い。例えば、イエスの受苦日礼拝、イースター礼拝、熊本地震追悼礼拝、聖霊降臨日記念礼拝、宗教改革記念礼拝、学校創立記念礼拝、クリスマス音楽讃美礼拝である。

これらの礼拝においても多様性がある。より感性的に印象付けるために、イースター礼拝では、出席者全員にイースターエッグを配布した。ただ、食中毒を防ぐために、中に飴を入れた象徴的なプラスチック製のたまごを用いている。

ただ普段の記念礼拝でも、15分間の中で行うが、クリスマス讃美礼拝は特例的に1時間の礼拝となっている。

そのほか、絵本による礼拝も行われる。理由は二つがある。一つは本学にはこども専攻があり、絵本はよく使われ、学生にとって親近感がある。それゆえ、礼拝に絵本を導入したら抵抗感が少ない。もう一つは、絵を見ながらの話は受け止めやすい。よって、3年前に絵本による礼拝を導入した。

さらに、聖歌隊・オルガニスト・ハンドベルチームによる讃美礼拝、「みんなで讃美礼拝」、チャペル委員有志による讃美礼拝、などがある。それを導入する理由は次の通りである。ほかのキリスト教大学の同僚と話し合ったら、礼拝では学生が讃美歌を歌う声が小さい、という苦情がよく聞こえる。その苦情を乗り越える対策の一つが讃美礼拝の導入である。特に「みんなで讃美礼拝」は大変好評であった。

また月1回の誕生日該当者への祝福礼拝、年に1回の新成人祝式、自治会役員祝式、年度最終礼拝にチャペル委員祝式などをも行う。

(2) 礼拝について学生の感想

筆者の「キリスト教Ⅱ」という授業で、学生のレポートで礼拝についてこういう感想がある。以下少し引用する。

「僕はキリスト教徒ではないが、神様はいると信じている。神様に見てもらえていると思うと毎日の礼拝が充実したものになった。」

「礼拝を通して自分の生活を省みたり、心を落ち着かせたりするのが良い習慣となっている。これからも続けていけたらと思う。」

「キリスト教との関わりが、今まで私が経験した

ことがなかったので、とても不安であった。しかし、礼拝に参加していくうちに、自然と抵抗＝壁のようなものがなくなっていったことに気づき、嬉しいと感じた。」

「キリスト教の教えは、宗教ではないところでも大事だと言われていることが多いなと思った。」

「日々の礼拝を通して成長できていると実感する。・・・毎日継続することはやはり気持ちの問題であろう。友達を誘って、これからも変わらず毎日讃美歌を歌い、祈りを捧げたい。」

「学校の礼拝のほう短い時間で内容がギュッと凝縮されているので話が頭に入りやすい。」

また、毎日礼拝に来ていたある学生の感想はこうである。「キリスト教を学び始めてから以前よりも幸せなことが増えた気がする。それは急に幸せなことがたくさん舞い込んできたのではなく、自身の考え方の変化からだと思う。小さなことでも幸せだと思ひ、辛いことから逃げず、逆にそれが成功した時の喜びを感じることができるようになった。しかも昨年の自分と比べ、明らかに笑顔が増えた。古くからの友人にも最近表情が変わったと言われるほどだ。」

(3) 礼拝が好きになった理由

次の表3から、2017年度の卒業生には、4年間皆勤者が2人いると分かった。実はその表に示されていないもう一人の皆勤者がいた。この方は2年生からの3年間の皆勤であった。最初は色々な理由で礼拝に行かなかったが、ある日友人と一緒に礼拝に行き始めて、そして友人が礼拝に行かなくなっても、1人で礼拝を続けたのである。それについて、この方はこう語った。「時には、何か嫌なことがあったり、いらいらしたり、気持ちが落ち込んでいて、説教が頭に入ってこないこともあったが、チャペルという空間にいて気持ちが少し落ち着いた。いつの間にか礼拝は、私の心のより所となっていたのである」と。またこうも続けた。「気づけば、2年生、3年生と礼拝で皆勤になり、4年生となった今もこうして礼拝に通いつけている。4年生になってからは、就職活動で県内外を飛び回り、多い時には1週間試験や面接を三つも四つも受け、更にアルバイトも続けていたので、毎日寝不足であった。今までにないほどの疲労とストレスで、家に帰ると泣いてしまう日もあった。それなら礼拝なんか行かずに寝ていればいいのに…と思われるかもしれないが、心身と

もに疲れていた私には、そんな時だからこそ礼拝が必要だったのである。いろいろな方からのお話を聞き、聖歌隊・ハンドベルの讃美を聞き、そしてチャプレンや聖歌隊メンバーの顔を見てまた頑張れるようにこの場所に来ていたのだと思う。私は卒業するまで礼拝に通いつけるつもりである。私を今まで支えてくれた『礼拝』への恩返しは、『礼拝に通いつけること』だと思っている。また、私は就職先が〇〇に決まっているので、そこでもいろいろな教会を見つけて、礼拝に行ってみたいと考えている。みなさんにとっても、ここでの礼拝がいろいろなことを頑張れる糧になればいいなと思っている。」⁷と。

筆者はこの話によって、大変励まされた。3年間皆勤という名目はない。従って最後までには賞状や賞品をももらえない。ところで逆に言うと、この方が礼拝に来る目的はとて純粋で、心を静めるためだけだったのである。付録2に、「就活」は礼拝に出席しない理由の一つとされて、印象的である。一見、本当に理由になれると思えるが、この学生は違う。これこそ、筆者が学生に礼拝を勧めたい理由である。これからは形として礼拝に参加することを通して学生が神を認識し体験していく機会を提供し続けていくことを願っている。

6. 調査・分析・改善策——結語にかえて

以上、礼拝の実践について述べた。次に、統計やアンケートの結果を見つつ、これからのキリスト教教育の実践への展望につなげてみたい。

(1) 礼拝出席率の推移

本学礼拝の年間平均の出席率は、次の表3の通りに、2014年を除けば、大体全学の16%台を維持できた。また2014年になぜ急に落ちたか、当時調査しなかったため、理由が分からなかった。しかし2016年の熊本地震以来連続2年間が低迷していた。しかも表3の「皆勤・精勤者数」の項目からも反映されている。それは大地震が人の心まで大きく影響しているのではないかと理解している。

ところで、地震が原因かどうかはさておき、礼拝についての状況を正確に把握するため、宗教委員会で全学学生向けのアンケート調査実施を決めた。そして各授業担任の教員の協力を受け、2017年10月に、

表3 礼拝出席の統計

年度	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
礼拝回数	146	143	152	152	137	149	142
出席率 (%)	16.3	16.6	14.0	16.5	12.9	13.6	16.4
皆勤・精勤者数	25	24	25	26	21	18	32
4年間皆勤数	0	1	5	3	1	2	2

出所：筆者作成

礼拝出席の様子



出所：本学のチャペル委員会広報係作成

ほぼ1か月をかけてそれを実施した(資料1を参照)。その統計表(資料2を参照)に基づいて、宗教委員会で深く分析した。

(2) 「礼拝に出席しない理由」についての分析

第一に、「礼拝に出席しない理由」について考えてみたい。

「面白くない」と答えた人は10.3%、「全然興味がない」と答えた人は28.8%、「別の信仰を持っている」と答えた人は2.4%、「時間がない」と答えた人は32.2%、「授業が延びたため」と答えた人は1.7%、

「授業がない日が多くなったため」と答えた人は22.2%である。

また「その他」の理由についてこういうものもある。

① 「長い」「面倒」「メリットがない」「一人になれる時間が欲しい」「信仰がないので参加しているのが良くないと思った」「キリスト教を信じているわけではないから」「高校3年間礼拝があったのでもういいかな」……。以上からは礼拝をよく理解しておらず、関心がないことが分かる。

② 「朝起ききれない」「寒くて動けない」「礼拝のために早くいくのがつらい」「睡眠時間にあてたい」「1限後疲れて休みたい」「礼拝の時間に朝食を食べているから」「やるが多すぎていけない」「ほかにしたいことがある」「宿題がしたい」「課題をする時にあてているから」「わざわざ足を運びたいと思わない」「学校に行けていない」「礼拝は嫌いではないが、自分のゆっくりする時間が欲しいため、どうしても礼拝に行くことが少なくなってしまう」。以上からは、自分のスケジュールに、「礼拝」が低く位置付けられていることが分かる。

なお、「1限目の授業が少なくなったことによって、朝来なくなった」と書いていた人がいるが、「フルコマが多かった」と書いた人もいる。理由はちょうど正反対だったので、面白く思ったが、礼拝を大事にしていないことが分かる。

③ 「レポート提出が終了した」「強制でないから」という理由に対して、義務でない礼拝に行く動機付けがないことが明らかになった。

④ 「皆勤じゃなくなったから」「友達が行かなくなった」「友達と次の授業の部屋に移動して話している方が楽しい」という理由から、礼拝出席に何らかの目的があると分かる。

⑤ 「チャペル委員の人が行かなくなったため」という理由を見て、心を痛んでいる。前文にチャペ

ル委員の役割が大きいと述べたが、「チャペル委員の人が行かなくなった」姿を見て、自分も礼拝に行かなくなることから、全学生に礼拝の必要性についての説明がまだまだ足りないと感じたほか、チャペル委員の模範意識に働きかける重要性をも痛感した。

- ⑥ 「コマ数が増えて忙しくなった」「模擬授業など次の授業の準備があって参加できない」「就活」という理由について、カリキュラムの設定にも原因があると分かる。

(3) 「礼拝が面白くないと思う理由」についての分析

第二に、「礼拝が面白くないと思う理由」について考えてみたい。

「讃美歌は面白くない」と答えた人は4.5%、「説教は面白くない」と答えた人は9.1%、「祈りは面白くない」と答えた人は5.9%、「静かにすることは面白くない」と答えた人は3.3%である。

特に最後の「静かにすることは面白くない」という答えについて大変面白く思う。なぜなら、学生の皆さんに礼拝のメリットとして、「心を静めることができる」と勧めていたのに、それと正反対に、「静かにすること」が嫌いな人も3.3%がいることに、驚いた。

「その他」の理由は次のようにもある。

- ① 「礼拝の意味を感じない」という答えについては、これからの宗教委員会の課題とする。
- ② 「礼拝を評価の対象にすることは間違っている。例えばKLCの奨学金や講義など」という答えについては、二つに分けて考えなければならない。

一つ目は、本学の奨学生の評定に、様々な評価項目がある。礼拝の出席率もその中の一つの評価対象になっている。奨学生は学績だけではなく、仁徳も優秀であるべきだと思うから、キリスト教教育の一つの補完手段として、礼拝の出席率を参考するのは、筆者はいいことだと思う。それにしても、今度奨学金を評定する部門である「学生支援センター」と緊密に連携し、学生に誤解を与えないように、より丁寧に説明する必要があると感じている。

もう一つは、筆者の「キリスト教Ⅱ」という授業に、大学チャペル礼拝に出席し、レポートを書くことを要求し、授業成績の評定に30%としている。

その理由はこうである。たったの15回の1.5時間ず

つの授業で、キリスト教に関する知識を十分に教えることはできない。だから筆者の授業の一つの補完として、礼拝の参加を勧めている。レポートを書くことはその具体的やり方である。それは平時学習態度に参考できると筆者は今でもそう思う。そして授業でも十分に説明している。それにしても、そのような誤解があるので、これからより丁寧に説明しようと思っている。

(4) 「礼拝に出席する理由」についての分析

第三に、「礼拝に出席する理由」について考えてみたい。

「興味がある」と答えた人は6.9%、「ためになる」と答えた人は10.5%、「友だちが行くから」と答えた人は6.7%、「友だちに会える」と答えた人は2.9%、「勇気づけられる」と答えた人は3.3%、「心を静めるため」と答えた人は10.0%、「神と出会いたい」と答えた人は0.3%、「奨学金のため」と答えた人は3.3%、「レポートのため」と答えた人は0.5%である。

「その他」の理由は以下のようなものである。

- ① 「讃美歌を歌ったりするのが楽しいから」「皆勤を目指しているから」「チャペル委員だから」という答えから、目的や責任感を持っていると分かる。
- ② 「なんとなく」「すべきことがないから」「特に済ませなければいけない用事がない時に行こうかなという気になる」という答えから、明白の目的がなくとも出席していると分かる。
- ③ 「高校生の時から行っているため」という答えから、礼拝が習慣付けられていると分かる。

第四に、「どんな礼拝に興味があるか」という項目について考えてみたい。

「通常の礼拝」と答えた人は5.9%、「聖歌隊かハンドベルチームによる讃美礼拝」と答えた人は5.3%、「みんなで讃美礼拝」と答えた人は6.4%、「地震追悼礼拝」と答えた人は1.2%、「イースター礼拝」と答えた人は3.1%、「ペンテコステ礼拝」と答えた人は2.1%、「クリスマス礼拝」と答えた人は7.9%である。

(5) 改善対策とこれからの展望

上記の分析に基づいて、対応策として宗教委員会で絶えず検討している。

第一に、礼拝の目的と大切さ、そしてほかのことに比べての優先順位を、いろいろな機会を用いて押

しつけがましくなく周知すること。

第二に、礼拝での説教により力を入れること。その語る内容が礼拝に相応しい上で、聴衆に分かりやすく伝わるように意識しつつ努めている。

第三に、礼拝の内容をより豊かにすること。例えば、アンケートを実施してから、絵本による礼拝を月1回の程度導入したように、である。

讃美礼拝の様子



出所：本学のチャペル委員会広報係作成

第四に、讃美礼拝により工夫すること。例えば、好評である讃美礼拝の種類を増やした。今は、讃美礼拝に、聖歌隊による讃美礼拝、ハンドベルチームによる讃美礼拝、聖歌隊・ハンドベルチーム・オルガニストによる合同讃美礼拝、みんなで讃美礼拝、チャペル委員有志による讃美礼拝、などがある。

特に、「みんなで讃美礼拝」と「誕生月の方への祝福礼拝」には、ゴスペルバンドのような形で行って

いる。場合によって、手拍子やダンスも導入している。

第五に、チャペル委員の模範意識をより強く育てること。それは毎月の各係会議を通して徐々に委員に励ましつつ伝えようとしている。

実績として、二つのことが実現できた。

① 礼拝を通して、参加者はみんな讃美歌を歌えるようになった。特に「みんなで讃美礼拝」を通して、讃美歌を聞くだけでなく、歌えるようになるという目標を達成した。

② 2019年度の前半期の礼拝平均の出席率は、2018年度の同期よりさらに4%ほど上がったのである。これからも、キリスト教教育の大切な一環として、礼拝を、本学の一つの誇りとして維持できるように、力を尽くしたい。

注

- 1 「九州ルーテル学院大学2019学生生活ハンドブック・学生便覧」, 2019, pp.37
- 2 三省堂大辞林第三版, 2006, pp.20
- 3 新約聖書のヨハネによる福音書13章34節, 新共同訳聖書の新約 pp.196
- 4 中学校「私たちの道徳」 pp.212～
- 5 新約聖書のルカによる福音書10章27節, 新共同訳聖書の新約 pp.126
- 6 新約聖書のマタイによる福音書25章40節, 新共同訳聖書の新約 pp.51
- 7 チャペル礼拝説教・スピーチ集, 九州ルーテル学院大学宗教センター編集, 2017年, pp.15-16

資料 1

2017 年度礼拝出席アンケート

この度宗教委員会では礼拝の改善を目的として全学生を対象にアンケートを行うことになりました。ぜひご協力ください。なお、このアンケートで皆さんの学生生活に不利益を生ずることはありませんのでご安心ください。

学年 1・2・3・4

専攻コース 1.キャリア・2.保育コース

3.児童教育コース・4.心理臨床学科

1. あなたは週に何回位礼拝に出席していますか？

- ①殆ど出席していない ②週 1 回 ③週 2 回 ④週 3-4 回 ⑤ほぼ毎日

2. ①と答えた方のみ答えてください。

1) 何年生のいつ頃から行かなくなりましたか？()
2) 礼拝に出席しない理由を答えてください。(複数回答可)
①面白くない ②全然興味がない ③別の信仰を持っている ④時間がない
⑤授業が延びたため ⑥授業がない日が多くなったため ⑦その他()

よろしければもう少し具体的に教えてください。

3. 礼拝を「面白くない」と答えた方におたずねします。

礼拝のどこの部分が面白くなく思われるのか？(複数回答可)
例えば ①讃美歌 ②説教 ③祈り ④静かにすること ⑤その他()

よろしければもう少し具体的に教えてください。

4. 礼拝に出席している方が答えてください。

礼拝に出席する理由を答えてください。(複数回答可)
①興味がある ②ためになる ③友達が行くから ④友達に会える ⑤勇気づけられる
⑥心を静めるため ⑦神と出会いたい ⑧奨学金のため ⑨その他()

よろしければもう少し具体的に教えてください。

5. 「興味がある」と答えた方におたずねします(複数回答可)。

どんな礼拝に興味がありますか？
1) 以下の礼拝について
①通常の礼拝 ②聖歌隊かハンドベルチームによる讃美礼拝 ③みんなで讃美礼拝
2) 特別礼拝について
①地震追悼礼拝 ②イースター礼拝 ③ペンテコステ礼拝 ④クリスマス礼拝

その他礼拝に関する

ことでご意見をお聞かせください。どんなことでも結構です。

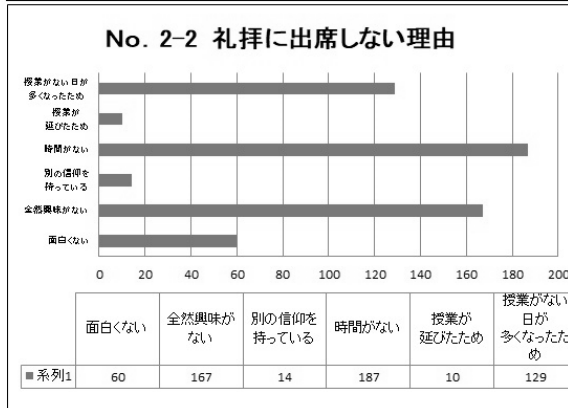
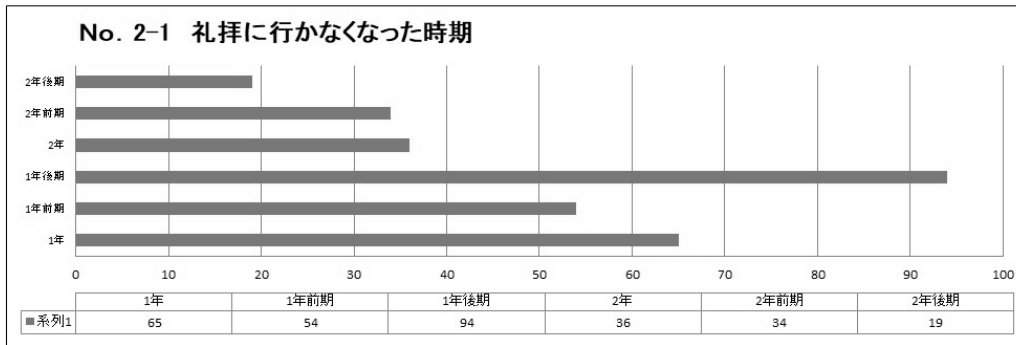
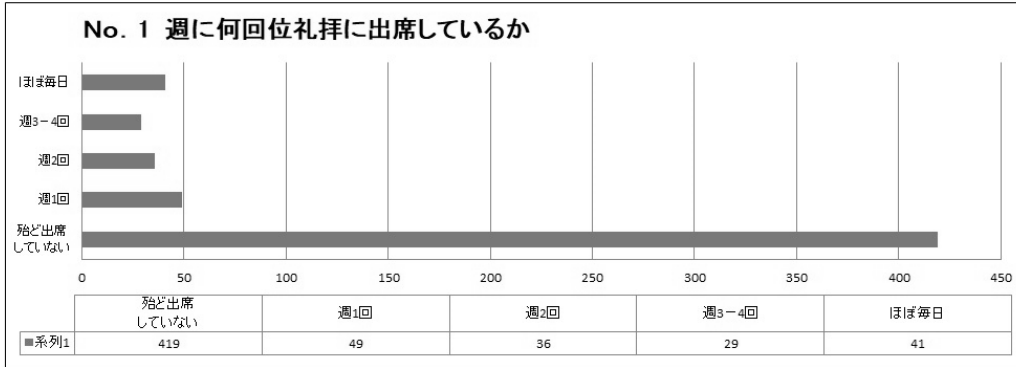
ありがとうございました

出所：宗教委員会作成

資料 2

2017年度 礼拝出席アンケート統括集計表

学年	1年生	2年生	3年生	4年生	計	専攻コース	キョリア	探病コース	児童教育コース	心療臨床学専修
	175	124	164	117	580		125	121	69	258



長い。朝起きれない。礼拝のために早く行くのがつらい。睡眠時間にあてたい。1限後疲れて休みたい。やるが多すぎて行けない。フルコマが多かった。他にしたいことがある。課題をする時にあてているから。レポート提出が終了した。寒くて動けない。一人になれる時間が欲しい。わざわざ足を運ぼうと思わない。礼拝は嫌いではないが、自分のゆっくりする時間が欲しいため、どうしても礼拝に行くことが少なくなってしまう。宿題がしたい。就活。皆勤じゃなくなったから。礼拝の時間に朝食を食べているから。1限目の授業が少なくなったことによって、朝来なくなった。学校に行けていない。コマ数がつまって忙しくなった。模擬授業など次の授業の準備があって参加できない。友達が行かなくなった。チャペル委員の人が行かなくなったため。強制でないから。高校3年間礼拝があったのもういいかな。面倒。メリットがない。キリスト教を信じているわけではないから。信仰がないので参加しているのがよくないと思った。友達と次の授業の部屋に移動して話しているほうが楽しい。

No. 3 礼拝の面白くない部分

讃美歌	説教	祈り	静かにすること
26	53	34	19

礼拝の意味を感じない。礼拝を評価の対象にすることは間違っている。例えばKLOの奨学金や講義など。

No. 4 礼拝に出席する理由

興味がある	ためになる	友達が行くから	友達に会える	勇気づけられる	心を静める為	神と出会いたい	奨学金の為	レポートの為
40	61	39	17	19	58	2	19	3

讃美歌を歌ったりするのが楽しいから。なんとなく。すべきことがないから。特に済ませなければいけない用事がない時に行こうかという気になる。高校生の時から行っているため。チャペル委員だから。皆勤を目指しているから。

No. 5 どんな礼拝に興味があるか

通常の礼拝	聖歌隊がハンドベルチームによる讃美礼拝	みんなで讃美礼拝	地震追悼礼拝	イースター礼拝	ペンテコステ礼拝	クリスマス礼拝
34	31	37	7	18	12	46

出所：宗教委員会作成